

新刊紹介

| | |
|-------|---|
| 著者 | 里見 信生, 清水 建美, 鈴木 三男, 綿野 泰行 |
| 著者別表示 | Satomi, Nobuo, Shimizu, Tatemi, Suzuki, Mitsuo, Watano, Yasuyuki |
| 雑誌名 | 植物地理・分類研究 |
| 巻 | 41 |
| 号 | 1 |
| ページ | 4p. |
| 発行年 | 1993-06-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/00055695 |



名付けられた。

スズムシバナとユキミバナの相違点は次のようである。①スズムシバナは直立(高さ約60cmまで)するのに対して、本種は匍匐する(花茎は10-30cmの高さ)。②地上部は冬に枯れるのに対して、本種は冬も枯れず、常緑である。③茎は太く(直径3-5mm)、稜があって、ほとんど無毛に対して、本種は細く(直径1.2-2mm)、稜が無く、長白毛がある。④葉は三角状広卵形に対して、本種は菱形状楕円形である。⑤花冠の内面は有毛に対して、本種は無毛である。⑥短い1対のオシベの花糸は長毛があるのに対して、本種はほとんど無毛である。⑦花期は8月中旬から10月上旬に対して、本種は9月上旬から12月中旬である。⑧分布は九州、四国、本州で、本州では東限が滋賀県南部であるのに対して、本種は福井県嶺南地方と滋賀県北部である。⑨染色体数は $2n=60$ に対して、本種は $2n=30$ である。

ユキミバナの分布する福井県の嶺南地方は、雪の量が少なく福井県では暖地性植物が多く見られる所で、植物地理学上興味ある所である(田代, 1973)。そこにはオオキンレイカ、ワカサハマギク、ナガエ

ノアザミ、ハイタムラソウ、フクイカサスゲ、モミジチャルメルソウなどが分布する。

都立大学理学部牧野標本館の滋賀県高島郡朽木村大野産園一郎の標本に杉山泰一氏は「*Strobilanthes oligantha* Miq. var. *parvifolia* Momiyama」と1977年に同定されている。しかし、これは未発表である。

また、最近出版された渡辺定路氏の福井県植物誌(1989)にはこの植物はスズムシバナとして扱われているが、「このスズムシバナの茎は地上を匍う」と注釈を書かれている。

本植物は葉が小さいことや匍うだけでなく、前述のような諸特徴が認められるので、別種とする方がよいと考えられる。

これまでの調査では、福井県にはユキミバナだけでスズムシバナの分布は確認されていない。また、北村四郎氏の滋賀県植物誌(1968)では、スズムシバナの産地として豊郷村四十九院と朽木村大野の2カ所があげられているが、朽木村大野のものはユキミバナそのものである。

(received December 19, 1992; accepted February 13, 1993)

○ 山梨県植物研究会 山梨県巨木誌 B5判, 474頁。平成4年11月30日発行。非売品。

山梨県の巨木に関する著書は「山梨県名木誌」(1931)、「山梨県巨樹名木誌」(1974)が発刊されているが、後者にしても刊行されてから、既に20年余を経過して、その間に枯死するものが目立ちはじめ、国指定天然記念物にしても、19件の内7件が指定の解除がされている。したがって、新たに調査をする必要が生じて来た折から、昭和63年(1988)に、環境庁の「巨樹・巨木林調査」が全国一斉に行われた。

山梨県植物研究会(〒400 甲府市山宮町2800-109, 大久保栄治)ではこの調査を基に、再調査を行い、本書を編集発行した。

出版費については平成3年9月、(財)日野自動車グリーンファンドの「樹木の保護に伴う出版助成費」を受けられたとのことである。

解説は裸子植物:22種, 183件, 被子植物:73種, 224件, 計95種, 407件が採録されているが、それぞれには写真が添えられている。各種の中で、件数の最も多いものはケヤキとスギの各50件で、以下エドヒガン25件, モミ19件, イチョウ18件, アカマツ15件, ヒノキ14件, カヤ13件, トチノキ13件, ツガ11件と続いている。

○ 長瀬秀雄 写真で見る久々野の野生植物 B5判, 446頁。平成4年11月発行, 岐阜県大野郡久々野町役場。非売品。

久々野町は岐阜県の北部、飛騨の中央に位置し、面積はおおよそ100Km²、人口はおおよそ4,300人、約89%が山林で、耕地には果樹と高冷地野菜の栽培が、盛んに行なわれている。

著者は果樹園経営を本業とするが、そのかたわら精力的に飛騨地方の植物の調査研究に従事される方として良く知られている。

久々野町の委託を受け、平成2~4年の調査期間中に、170回の現地調査を行なった由で、これは長瀬さんでなくては出来ないことである。紹介者はこの御苦労に対して、心から敬意を表する。

その結果、確認された植物は1,090種余で、その写真がカラーで、全頁のおおよそ半分の210頁をしめている。それ故に表題を「写真で見る……」とされたのであろう。(里見信生)

1978. An Enumeration of the Flowering Plants of Nepal, British Museum, London. Vol. I: 76.
- LIU, D.-M. and ZENG, W.-Z. 1986. Two new species of *Polygonatum* from Sichuan. Bull. Bot. Research 6(2): 91-96.
- LIU, Y.-P., KOMATSU, K. and NAMBA, T. 1993. Pharmacognostical studies on the *Polygonatum* plants (Part III). On the anatomical characteristics of the *Polygonatum* rhizomes from China. Shoyakugaku Zasshi 47(in press).
- NAMBA, T., KOMATSU, K., LIU, Y.-P. and Mikage, M. 1991. Pharmacognostical studies on the *Polygonatum* plants (Part 1), On the Tibetan crude drug "Ra-mNye". Shoyakugaku Zasshi 45: 99-108.

摘 要

ユリ科の *Polygonatum cirrhifolium* (WALL.) ROYLE と *P. verticillatum* (L.) ALL. の根茎はチベット医学で "Ra-mNye" の名称で薬用にされている。両

種はともに輪生葉を有する点で類似し、また根茎の形状も似ているが、ともに種内変異の大きい種である。本研究では極西部ネパールで採集した両種の根茎を互いに区別する目的で外部及び内部形態的に検討した。その結果、内部形態でも両者は区別されたが、外部形態的にも *Polygonatum cirrhifolium* の根茎表面に多数の小疣状突起があることで容易に *P. verticillatum* の根茎と区別できることが明らかになった。その結果、今回カトマンズで入手したチベット薬物 Ra-mNye の原植物は *Polygonatum verticillatum* であることが確認できた。

なお根茎表面の小疣状突起は、劉代明らにより 1986 年に新種として発表された *Polygonatum strumosum* の一特徴とされているが、本研究における実験材料を同種のタイプ標本と比較した結果、同種の地上部の特徴とされた乳頭状突起の分布と明らかな違いが見られた。本種は倍数性をも含め、さらに分類学的な検討が必要であろう。

(received December 17, 1992; accepted April 5, 1993)

○日本植物分類学会(編著)レッドデータブック——日本の絶滅危惧植物 A 4 判, 143 頁。1993 年 5 月 10 日発行, 農村文化社(〒101 東京都千代田区内神田 1-3-5)。3,500 円。

1989 年に、「我が国における保護上重要な植物種および植物群落の研究委員会植物種分科会」(岩槻邦男座長)は、日本自然保護協会および世界自然保護基金日本委員会の協力を得て「我が国における保護上重要な植物種の現状」(いわゆるレッドデータブック)を発刊した。ここには科別および県別の絶滅種・絶滅危惧種・危急種・現状不明種の総数 895 種の植物が記録された。

今回出版されたレッドデータブックはこの本の普及版であり、編集は日本植物分類学会絶滅危惧植物問題検討委員会(矢原徹一委員長ほか 3 名)、執筆者は井上健氏ほか 9 名の若手の植物分類学者である。本の構成は、第 1 章 絶滅のおそれのある植物種の現状、第 2 章 絶滅のおそれのある代表的な植物、第 3 章 わが国における保護上重要な植物種リストとなっている。第 1 章は野生植物の種の保護の必要性、わが国における野生植物の生育地の現状など、ほぼ 1989 年版レッドデータブックを踏襲した内容となっている。この本の特徴は、第 2 章にある。ここでは代表的な植物としてマツバラシ・ヤクタネゴヨウ・ミクリ類・アツモリソウ属・キビヒトリシズカ・ムラサキツリガネツツジなど多くの種が生育地のカラー写真とともに分り易く解説され、危急・絶滅危惧などのランクが示されている。第 3 章は 895 種の道府県別一覧表である。私はかつてヨーロッパやオーストラリアなどで絶滅危惧植物のカラー図鑑やポスターをみ、日本でこの種の出版物を出したらどんな影響がでるか危惧していたものだが、今やわが国でもヨーロッパ並みの国情になったものと感慨深いものがある。それにしても、この本の出版のかけには、名前の挙げられた各位のほかに、各地の植物研究者や愛好者など実に多くの協力者があったことを忘れるわけにはいかない。

(清水建美)

○筒井貞雄(編)福岡県植物研究会 福岡県植物目録 第 2 巻 B 5 判, グラビア 60 頁+本文 385 頁。1992 年 4 月 1 日発行, 福岡県植物研究会。頒価 8,000 円。

第 1 巻のシダ植物に続き、第 2 巻がこのほど発行された。本書は、第 1 部福岡県産種子植物標本目録と第 2 部同分布図集から成り、巻頭には生育地の植物のカラー写真 40 頁、基準標本の白黒写真 12 頁、植物図 8 頁を収める。とり上げられた植物は、裸子植物および双子葉植物綱古生花被亜綱ヤマモモ科からアブラナ科まで科毎の短い解説に続く種毎の標本リストと主として分布に関する短いノートがある。第 2 部ではこれらすべての種の分布図が 5 万分の一の地形を 16 等分したメッシュ法で示されている。昨今は、生物の多様性保全の世界的な趣性とも相まって、地方植物誌の編集が期待され各地で進められるようになって来た。本書のように正確な標本に基いた植物目録の出版は、地方植物誌のあり方を示すものとして評価される。

(清水建美)

○岩槻邦男 多様性の生物学 A5判, 15+174頁。1993年3月18日発行, 岩波書店, 2,800円。

同書店の大学一般教育用の教科書シリーズ「生物科学入門コース」の8冊目として発行されたのが本書である。8章からなり、後述の1, 2章があり, 3章が種の構造, 4章が種分化, 5章が種間の類縁, 6章が系統をあとづける, 7章が真核生物の系統, 8章が生物の分類体系となっていて, 親しみ易い線画と各所に挿入されたコラムがある。3-8の各章はここにタイトルを紹介しただけでも凡その内容は分かってもらえると思うが, 本書の特徴は何と言ってもその前にある。1, 2章ではなぜ生物は多様なのか, それはどう調べられるか, そして実際のどのくらい多様なのかというところで, 既知約150万種, 実際は1,000万種を越えるとの推定も紹介されている。そしてこれらを明らかにする生物誌編纂の必要性, 日本の植物誌, 環境の変動と種の動態として絶滅危惧の問題も取り上げられている。評者は一般教育担当という立場上, 大学生向けの「教科書」を随分見てきているが, フロラをまともに取り上げたのはおそらく本書が始めてだろう。そして, 地球生物保全の観点から絶滅危惧の問題もきちんと取り上げており, それらに対する理解が得られるという点で, 生物学が専攻でない学生も本書を学ぶことは意義が大きい。最近の教科書はかつての「一般生物学」というようなものは減り, 正に「多様化」し, テーマを絞って, しかも平易に展開している良書が増えてきた。本書は其中で植物の分類, 系統, 地理をDNAから化石までを使って, 正確に, しかも, 平易に説いている。大学の教科書としてだけでなく, 一般の人達, そしてなによりも我々植物を学んでいるものにも大変勉強になる本である。(鈴木三男)

○川原健彰：奥能登にタンゴイワガサ Toshiaki KAWAHARA: Occurrence of *Spiraea blumei* G. DON var. *obtusata* (NAKAI) SUGIMOTO in Okunoto, Ishikawa Prefecture

平成5年5月9日, 石川県鳳至郡能都町小垣で, タンゴイワガサ(ミツバイワガサ)の群生を発見した。生育地の標高は20~30m, 山の崖地に巾200mにわたって生え, ちょうど花の盛りであった。周囲にはクガイソウ・マルバアオダモ・ミツバウツギ・チャボガヤなどがみられる。この崖地の頂上には標高128.5mの三角点があり, 山の南側斜面がそのまま, 山田川の谷へなだれ込んだ姿で断崖を形成し, 急峻な形になっている。海岸までの直線距離は1.5kmで比較的海に近い位置にある。

小垣は能登半島の内浦, 半島の中央部よりやや北寄りにある。タンゴイワガサは, 従来「福井県以西の日本海側の海岸に生える」(佐竹義輔ほか編「日本の野生植物 木本1:185, 1989)とされ, 渡辺定路氏の「福井県植物誌」(1989)には, 敦賀以西の産地だけが記録されている。小垣は敦賀以北の最初の発見地となる。標本は川原健彰8072(KANA 160854)。(〒923-12 石川県能美郡川北町草深そ10-1, So10-1, Kusafuka, Kawakita-cho, Nomi-gun, Ishikawa Prefecture 923-12)



奥能登で発見されたタンゴイワガサ, 平成5年5月16日, 能都町小垣で撮影

○ 石井実・植田邦彦・重松敏則 里山の自然を守る 四六判, 171頁。1993年5月25日発行。築地書館。定価1,800円。

冒頭の章で、とても印象的なエピソードが紹介されている。目黒の国立科学博物館附属自然教育園は、1949年に白金御料地につくられたが、ここは開設以前には、地域住民が入り込み木を切って薪にしたりということがよくあった。開設の年にこの地は天然記念物に指定され雑木林も厳重に守られたが、残念なことに当時普通にみられた50種ほどのチョウのうち、ゼフィルス類を含む13種は開設数年にして姿を消してしまったという。厳重な保護が、生態遷移を進ませ、皮肉なことに多様性の減少に結び付いたのである。里山の生物は、人間の関与による遷移の途上段階の微妙なバランスの生態系の主であり、“立ち入らない、手を付けない”という単純な保護がなりたらず、生態的管理またはモザイク管理(いろんな遷移段階をその地域内に共存させる)が必要になってくるのだという。第3章では、東海地方の低湿地に生育する絶滅にさらされた植物種がテーマになっている。低湿地は厳密な意味では里山ではないが、特殊な地質条件による土砂崩れと湧水が原因となっており、遷移の途上段階の生態系を維持している点で、里山と同じである。第4, 5章ではイギリスおよび日本での具体的な里山保全の方法と運動が紹介される。遷移相独特の生物の存在の認識、そして、それゆえの生態学的観点からの環境のマネジメントの提案は新鮮なものがある。(綿野泰行)

○ A-G. オドリクール・L. エガン著、小林真紀子訳 文明を支えた植物 A5判, 246頁。1993年2月25日発行、八坂書房。定価5,800円。

本書はフランスの民族植物学者オドリクールと農学者エガン両者による *L'homme et les plantes cultivées* (改訂新版1987)の全訳である。同名の旧版は、1943年に出版されているが、40年以上経過した今でもその価値を失っていないとして、改訂新版が出され、日本語版が出版されることになった。それは、序文にあるように、現代の遺伝子資源の研究と管理が栽培植物の歴史に対する興味を再燃させているという事情があるからに他ならない。本書は、第1章 変種の起源と分布、第2章 種の起源と分布、第3章 植物と農業の起源の問題、第4章 コロンブス前のユーラシア西部の栽培植物、第5章 異国の農作物(1. アフリカ、2. インド・オセアニア、3. 極東、4. アメリカ)、第6章 現代における人と栽培植物(1. 飼料植物、2. 嗜好植物と工芸植物、3. 白人の世界進出とその農業、4. 栽培植物の分布域の最近の拡散)の6章構成、世界的な視野から栽培植物の歩みと生物学的諸側面を伺い知ることができる。難をいえば、「野生植物の分布—ヴルフの地図」の項(第2章)に、種密度を表すヴルフの植生図を引用してあるが、種数の表示はあるが単位面積が記していないことぐらいか。また、極東の農作物の項に、日本の記事がほとんど含まれていないのは淋しい。訳者は、西洋古典学の専攻で、植物学は専攻したわけではないが、訳出に当っては植物分類学者や遺伝学者が協力しており、植物のベテラン編集者が植物名の考定を行っているのだから、十分に信頼できる訳出となっている。日本語の最新の栽培植物の入門書としても巷間に推奨したい。(清水建美)

○ 浅井康宏 緑の侵入者たち 帰化植物のはなし 朝日選書474 B5変型, 294頁。1993年5月25日発行、朝日新聞社。定価1,300円。

昭和20年代から帰化植物の研究に着手され、つとに、帰化植物の研究者として名高い著者が、「異国の侵入者たちとの間の、対話のなかから生れた、さまざまなエピソードをもとにして綴った、いわば帰化植物の入門書」をこのほど発行された。本書は、I 日本への侵入者たち、II 日本からの進出者たち、III 帰化植物あれこれ、IV 帰化植物ノートの4章構成となっており、Iは、帰化植物の定義・区分とその例、IIは外国で帰化植物となった日本の植物の紹介、IIIは日本のありふれた帰化植物——セイヨウタンポポ・ハルジョオン・ブタナなど29種——の解説、IVは、帰化植物をめぐる特殊な話題として、「日本でふえている水生帰化植物」「外来植物の同定、発表へのコメント」「久内先生と帰化植物」が収められている。私がかつてアメリカに滞在した折、スイカズラ・クズ・ノイバラは日本からの三大悪役と聞かされたものだが、日本の植物の海外での活躍ぶりを紹介した記事は誠に少く、貴重である(II章)。また、帰化植物の命名に対する“少数あるいは不完全なものによる同定、発表はさける” “同定に際しては、なるべく種を大きくみて行う”など6指針には学ぶべきものがある(IV章)。ところで、私は外来帰化のみならず、国内であっても環境の人為的変更に伴って分布圏を変えつつある植物も帰化植物と変わりはないとのみ方から国内帰化植物とよんでいる。北陸地方にもみかけるシロバナタンポポや南アルプスまで侵入したオオイトドリなどよい例だろう。ともあれ、この本は帰化植物を勉強したい人にまっ先にすすめたい本である。(清水建美)